

『海国図志』と日本 —塩谷世弘、箕作阮甫の訓点本について—

阿 川 修 三

『HǎiGuóTúZhì (海国図志)』 and Japan

Shuzo Agawa

中文提要

『海国図志』は清末思想家魏源編輯の世界地理書。这本书是在江戸时代末期从中国传入日本的。以后日本出版了很多抄本和翻译本, 得到很多读者的欢迎。这些抄本和翻译本之中, 盐谷世弘、箕作阮甫校注的抄本是最重要的。笔者在这篇论文中, 考察了盐谷、箕作校注抄本的内容、出版经过及其影响。

0 はじめに

幕末から明治初年にかけて、日本近代の初期において、西洋事情の撰取には、漢訳洋書（漢文に訳された、西洋学問の書で宣教師が執筆した書物）が大いに貢献した。この事実は専門家以外あまり識られていない。

江戸時代中期に起こった蘭学は、医学をはじめとする自然科学において目覚ましい業績を積み重ね、特に幕末には社会的影響力を増した。一方、世界地理研究は新井白石（1657～1725）の『采覧異言』（秘書として江戸時代には刊行されなかったが、写本で広範に流布）を嚆矢とし、それ以降研究が進められ、その成果は蘭学者山村才助（1770～1827）により『訂正増訳采覧異言』（享和2〔1802〕年）、箕作省吾（1821～

1847) の『坤輿図識』として結実した⁽¹⁾。そのような、世界地理研究の蓄積が、後で述べる『海国図志』の日本での受容のベースとなったことは言うまでもない。ただし、当時の西洋の地誌について、これらの書物はその情報が古すぎたのである。

19世紀初頭以来、日本周辺には出沒する外国船の数が増大し、開国を要求する西洋列強の圧力が日々に増す、という危機的状況の中で、日本の知識人の間では、西洋に関する知識（西洋地誌、西洋事情）が渴望されていた。そのような時期に、長崎に来港する中国の貿易船（唐船）が将来した漢訳洋書は当然ながら幕閣から志士に至る日本の知識人に大いに注目、歓迎された。そしてその大半は訓点を付けた和刻本が出版された。その地理、歴史関係で主要なものを挙げると、次の如くである。

『地理全志』上編5巻、下編10巻 ミュアヘッド（慕維廉） 上編
1853年、下編 1854年

和刻本 『地理全志』上編5巻・附訂誤1巻。安政5（1858）年晩秋
刊 爽快楼（岩瀬忠震）藏版 江戸 山城屋左兵衛等 発兌

『地理全志』下編10巻 安政6（1859）年夏刊 爽快楼藏版 安政6
年 江戸 山城屋左兵衛等

『地球説略』 ウエイ（禪理哲）1856年

和刻本 『地球説略』 箕作阮甫訓点 竹口瀧三郎図絵彫刻 江戸老皂
館 万延元（1860）年刊 3冊

『美理哥合省国（アメリカ合衆国）志略』 ブリッジマン（裨治文）
1838年、改訂版『亜美理駕合衆国志略』1846年、改訂第二版『聯邦志
略』1861年

和刻本 『大美聯邦志略』 箕作阮甫訓点 文久元（1861）年

『大英国志』 T.Milner著ミュアレッド（慕維廉）訳 1856年

和刻本 『英国志』 長門温知社 文久元（1861）年

原本刊行と和刻本刊行との時期が、極めて近いことから、多くの人々が如何に西洋事情を渴望していたかが分かる。

ここで取り上げる魏源の『海国図志』は、漢訳洋書そのものではないが、後に述べるが如く、漢訳洋書をベースに編纂されたものであり、漢訳洋書同様に幕末知識人に愛読された書物である。

本稿では、『海国図志』（1847年第2版）が日本においてどのように受容されたか的一端を知るべく、この書物の、代表的な、訓点本である、塩谷世弘、箕作阮甫の校注・訓点本について論じたい。それを通じて、近代日本における西洋事情受容のあり方を解明する一助としたい。

1 世界地理書『海国図志』

『海国図志』は、清末に魏源が著した、世界地理の書であり、また、海防を論じ、西洋軍事技術（大砲、火薬、軍艦等）を図によって視覚的に紹介した書物でもある。

i 内容と構成

地理については、北アフリカを除くアフリカ、オセアニアについては、記述がないが、それ以外の地域については、その地理、歴史がかなり詳細に記されている。また、海防（海から侵入してくる敵をどのように撃退するか）や西洋の武器、軍艦（蒸気船）についても詳細な記述があり、それが、本書の、他の世界地理書と大きく異なる特徴でもある。

日本で刊行された、『海国図志』の底本となっている、増訂第一版である60巻本（道光27（1847）年）の構成を、次に参考のため挙げておく。

卷一 籌海篇 卷二 図（地図） 第三～七 東南洋（東南アジア）海

岸之国 第八～十二 東南洋海島各国 卷十三～十九 西南洋諸国
卷二十～二十三 小西洋（北アフリカ）卷二十四～三十五 大西洋
欧羅巴（ヨーロッパ）洲 卷三十六～三十八 北洋 卷三十九～四十三
外大西洋墨利加（アメリカ）洲 卷四十四、四十五 表 卷四十六、
四十七 国地総論上下 卷四十八～五十 籌海総論上中下 卷五十一、
五十二 夷情備采 卷五十三 仿造戦船諸議 卷五十四 火輪船図説
卷五十五 鑄礮鉄模説 仿鑄洋礮説 炸彈飛礮説 礮車礮架図説 卷
五十六 西洋用礮測量説 西洋礮台図説 礮台旁設重險設 卷五十七
西洋自来火説設 仿造西洋火薬法 卷五十八 攻船水雷図説 用地雷
法 卷五十九 西洋器芸雑述 卷六十 西洋遠鏡作法

以上のように、60巻のうち、過半は世界各地の地理の記述ではあるが、
籌海（海防）篇や仿造戦船諸議などの、海防や西洋の軍事技術の紹介も
四分の一を占める。

ii 執筆の契機とその編纂

魏源が本書を執筆した契機は、林則徐から『四洲志』の原稿を渡され、その完成を託されたからである。林則徐は広東着任後、世界事情を知るべく、梁進徳（ロバート・モリソンの助手、梁發の子）に慕瑞（Hugh Murray）の『世界地理大全（The Encyclopedia of Geography 1834年）』を漢文に抄訳させていたが、アヘン戦争敗戦の責任を問われ、職を免ぜられ、北京に呼び戻されることになった。林則徐は北京に呼び戻される途中、旧知の魏源に原稿を渡し、その完成を託したのであった⁽²⁾。

魏源はその完成を期すべく、「前両広総督林尚書訳す所の西夷の『四洲志』に拠」（魏源『海国図志』原叙）って、則ち、『四洲志』をベースとして、『海国図志』の編纂に取りかかったのである。そして、『四洲志』

に「此（『海国図志』）、則ち、西洋人を以て西洋を譚る」（魏源「『海国図志』原叙」）との原則に立ち、漢訳洋書を資料として加えていった。それに魏源の意見も一部ではあるが付け加えられ完成したのである。『海国図志』で魏源が利用した主たる漢訳洋書は次の如くである⁽³⁾。

艾儒略 (Julius Aleni) 『職方外記』、南懷仁 (Ferdinandus Verbiest) 『坤輿図説』、瑪吉士 (マルケス) 『地理備考』、馬礼遜 (Robert Morrison) 『外国史略』、禱理哲 (Richard Quarterman Way) 『地球図説』、郭実臘 (Karl Friedrich August Gutzlaff) 『東西毎月統記伝』、郭実臘 『貿易通志』、裨治文 (Elijah Coleman Brigman) 『美理哥国 (合省) 志略』、麦嘉締 (Divie Bethune McCartee) 『平安通書』。

また、魏源が『海国図志』を著した目的は、その原叙によれば、「是の書何を以て作る。曰く、夷を以て夷を攻めんが為に作る、夷を以て夷を款せんが為に作る、夷の長技を師として以て夷を制せんが為に作る」即ち中国が夷（イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国）の長技〔武器、軍事技術〕を学び、夷に対抗することであった。

なお、その版本には50巻本（道光22年〔1842年〕）、60巻本（道光27〔1847年〕）100巻本（咸豊2年〔1852年〕）の三つがあり、訓点本の底本は60巻本、和解本はおおむね60巻本を底本としている。

iii 著者魏源

魏源（1794～1857）は湖南省邵陽県の人である。清末を代表する思想家の一人であるが、中々進士に合格しなかったために、官僚としては栄達できず、主に地方行政、漕運、塩務等に携わった。公羊学を学び、経世に志し、『海国図志』の他に『皇朝経世文篇』を編纂し、『聖武記』

を著し、また公羊学の立場で経学の書物も著した⁽⁴⁾。

日本では、『海国図志』の訓点本、訓訳本の出版以前に、『聖武記』の抄本が出版されており、魏源は日本の知識人の間で既に識られていた。

iv 中国での受容

『海国図志』は出版後、「夷の長技を師として以て夷を制す」という魏源の考え方が、一部の官僚、士人に認められ、『中外紀事』、『康輜紀行』、『防海紀略』などにも引用されたが、脚光を浴びるのはようやく同治の中興（洋務運動）以降であり⁽⁴⁾、多くの読者を得るのは、日清戦争敗北後である。その背景には、中華（華夷）思想がある⁽⁵⁾。アヘン戦争を経てもなお、その中華思想はまだ揺らぐことがなく、化外（教化の行き届かない）の地域（＝西洋）への関心はあまりないのが現状であった。

2 日本における『海国図志』

i 『海国図志』の将来

大庭脩『漢籍輸入の文化史』（研文出版、1997年）、『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学出版部、1967年）によれば、嘉永4（1851）年に中国渡来船が初めて3部将来し、3部は全て奉行所を通じて幕府（御文庫、学問所御用、老中牧野備前守忠雅）に買い取られた。翌嘉永5（1852）年にも、中国渡来船が1部を将来し、それは、長崎会所預かりとなった。更に、嘉永7（1854）年には、中国渡来船が12部を将来し、7部が幕府御用となり、他5部は競売された。

ii 訓点本と和解本の刊行

『海国図志』は、鮎澤信太郎『鎖国時代日本人の海外知識』「世界地理の部 四 幕末開国期に伝来した唐本世界地理書の翻刻と邦訳」（復

刻版 原書房、1980年)によれば、日本に最初に将来されて3年後の嘉永7(1854)年に、まず抄本ではあるが、訓点本、和解本が刊行される。その後、刊行されたものも含めると、訓点本6点と和解本17点の合計23点である。その殆どが日本に将来されてから六年間のうちに刊行されており、和刻本刊行までの時間の短さと点数の多さには驚かざるを得ない。次に訓点本と訓訳本、和解本に分け、その詳細を示すこととする。

訓点本

塩谷世弘(甲蔵)、箕作阮甫 校訂・訓点

- 1 『海国図志(籌海篇一、二 議守上下、籌海篇三、四 議戦上下)』二卷二冊 嘉永7(1854)年 須原屋伊八発兌
 - 2 『海国図志 普魯社国(プロシア〔スウェーデン、デンマークを含む〕)』一卷一冊 安政2(1855)年
 - 3 『海国図志 俄羅斯国(ロシア)』二卷二冊 安政2(1855)年
 - 4 『海国図志英吉利国(イギリス)』三卷三冊 安政3(1856)年
- いずれも底本は60巻本。

中山伝右衛門 校訂・訓点

- 5 『海国図志墨利加(アメリカ)洲部』(巻末に「火輪船図説」を付す)八卷六冊 嘉永7(1854)年 出雲寺文治郎発兌 底本60巻本

頼子春(頼三樹三郎、頼山陽の子。尊王攘夷論者、安政の大獄で刑死)校訂訓点

- 6 『海国図志 印度国部附夷情備采』三卷三冊 安政3(1856)年 底本60巻本

和解本（訓訳本）多くは60巻本を底本とする。

広瀬達

- 1 『亜米利加（アメリカ）総記』二卷二冊 嘉永7（1854）年
- 2 『続亜米利加総記』二卷二冊 嘉永7（1854）年
- 3 『亜米利加総記後編』三卷二冊 嘉永7（1854）年

正木篤

- 4 『墨利加（アメリカ）洲沿革総説総記補輯和解』一冊 嘉永7（1854）年
- 5 『澳門月報和解』一卷一冊 嘉永7（1854）年
- 6 『英吉利国総記和解』一卷一冊 嘉永7（1854）年
- 7 『美理哥国（アメリカ合衆国）総記和解』一卷一冊 嘉永7（1854）年
- 8 『美理哥国総記和解』上中下三冊 嘉永7（1854）年

大槻楨

- 9 『海国図志俄羅斯総記』一卷一冊 嘉永7（1854）年
- 10 『海国図志夷情備采』一卷一冊 嘉永7（1854）年
- 11 『海国図志仏蘭西（フランス）総記』一卷一冊 安政2（1855）年

小野元濟

- 12 『英吉利広述』二卷二冊 嘉永7（1854）年

皇国隠士

- 13 『新国国志通解』四冊 嘉永7（1854）年
- 14 『西洋新墨誌』四卷四冊 嘉永7（1854）年 奥付に「売買不可。三百部絶版」とある。

服部静遠（棟遠）

- 15 『海国図志訓訳（礮台図説、火薬製法、水雷図説）』上下二冊 安政2（1855）年

奥付に「売買不可。三百部絶版」とある。

南洋梯謙

16 『海国図志籌海篇訳解』三卷三冊 安政2（1855）年

奥付に「百部絶版 不許売買」とある。

鶴嶺道人

17 『海国図志国地総論』一冊 明治2（1869）年

上記の訓点本、和解本は地域ではアメリカ（墨利加洲、亜米利加）、イギリス（英吉士）、ロシア（俄羅斯）、フランス（仏蘭西）、プロシア（普魯社）、北洋（スウェーデン、デンマーク）、インド（印度）の諸篇であり、また、内容では、地域の地理、海防、軍事技術（武器）にわたっている。正しく当時の日本知識人の関心のありかを示している。

また訓点本や和解本の著者の中で、その履歴が確認できるのは、塩谷世弘（甲蔵）、箕作阮甫と頼子春（頼三樹三郎）のみであり、他は無名の人である。

iii 受容の背景

『海国図志』は幕末の日本でなぜこれほどまでに読まれたのか。その理由としては、まず当時の日本の知識人が、東アジアの大国中国がイギリスに敗れたという衝撃を受けた直後に、西洋列強から武力を背景に開国を求められ、それに対する対策として相手を理解するために、最新で、詳細な世界地理の知識を求めていたことが挙げられる。日本には中国とは違い、新井白石以来世界地理研究の蓄積があり、それは山村才助『訂正増訳采覧異言』に結実したが、内容が最新ものではなく、国内には知識人のそのような求めに適うものがなかったのである。それを補う形で西洋人の宣教師たちによって著された漢訳洋書の地理、歴史書が受容され

てはいたが、それもイギリスやアメリカなどの一部の地域に偏り、またそれ以外の地域については概ね簡略であった。『海国図志』は漢訳洋書ではないが、既に述べたように漢訳洋書を藍本とし、その記述は詳細である。

また、当時の知識人にとってより切実なのは、海防をどうするかであり、また、西洋の優れた武器についての知識も求められていた。既に1-iiで述べたように、『海国図志』は単なる世界地理書ではなく、海防や西洋の武器についても紙幅を割いている。塩谷世弘が『海国図志』を「其の實、武経大典なり」（塩谷世弘「『海国図志』を翻案するの序」）というように、この点が幕末の日本で本書が歓迎された重要な理由であろう。

それからもう一つ、本書が読まれた理由として重要と思われるのは、編者である魏源への共感である。塩谷世弘が「忠智之士（魏源）、国を憂ひ書を著す。其の君の用と為らずして、反りて他邦に^{たから}琛とさる。吾独り黙深（魏源）の為にのみに悲しまず、併せて清主の為にも悲しむ」（『海国図志』を翻案するの序）と言うように、少なくとも和刻本の校注者、翻訳者にはそれがあるように思う。

また、本書が漢文で書かれたことも、幕末の知識人のリテラシーと合致していたことも理由の重要な一つに挙げられるであろう。

3 塩谷世弘（甲蔵）、箕作阮甫校訂の訓訳本



図1『海国図志』『籌海篇』訓点本の表紙

ここでは、上記の訓点本・和解本の中で、塩谷世弘（甲蔵）、箕作阮甫校訂の訓訳本（図1）を取り上げたい。まだ限られた調査ではあるが、現存する訓点本、和解本の内、藩校や幕府の書庫、学問所に所蔵されていたことが確認で

きるものの中で、抜群に多い⁽⁶⁾のがこの本であるからである。

つまり、『海国図志』の和刻本の中で尤も影響力がある本と思われるからここに取り上げるのである。

i この本の来歴

塩谷世弘の「『海国図志』を翻栞するの序」(塩谷世弘、箕作阮甫校訂・訓点『海国図志』「籌海扁」)によれば、

此の書(筆者注以下同じ:『海国図志』)客歳(昨年)清商の始めて舶載する所と為る。左右衛門尉^{じょう}川路君(川路聖謨)之を獲て、其れ有用の書なりと謂う。命じて亟に翻栞せしむ。原刻甚だしくは精ならず。頗る譌(訛)字多し。予をして之を校せしむ。其の土地、品物の名称は則ち津山箕作^{しょう}岸西、洋音を行間に注す。…。

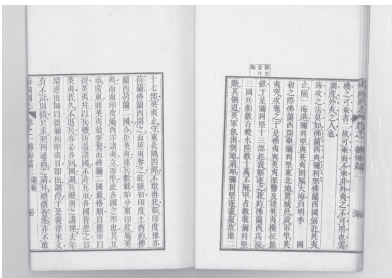


図2『海国図志』訓点本の校注と振り仮名

この本は川路聖謨の命により、塩谷甲蔵が校訂し、訓点を付し、箕作阮甫が西洋の地名や物品名に片仮名のルビを付けた(図2)ことが分かるのである。では、川路はどのような経過で『海国図志』を知り、その内容を評価し、その刊行を決意するに至ったのだろうか。

川路寛堂編述『川路聖謨之生涯』(近代文芸・資料復刻叢書第八集 世界文庫 1970年 元版 1903年)によれば、彼は幕府の書庫である紅葉山文庫から入架したばかりの『海国図志』を借覧し、海外の情報・知識を知るには格好の書物であると判断し、老中阿部正弘にこの書物の有益なるを説き、ついで阿部の許可の下、彼はそれを出版し、広く有志に配ることを

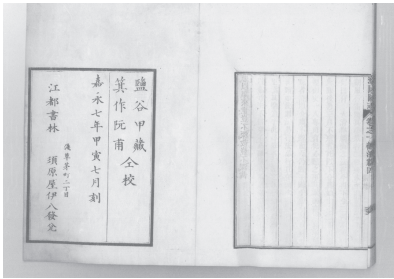


図3 『海国図志』訓点本の奥付

企画しそのために、江戸の版元須原屋伊八に依頼してそこから出版したのであった(図3)。

ii 川路聖謨、塩谷世弘、箕作阮甫次にこの訓点本にかかわる三人の人物、即ち、川路聖謨、塩谷世弘、箕作阮甫について述べる。

まず、この訓点本を企画、出版した、川路聖謨(1801～1868)である。彼は幕末の幕府官僚の英傑の一人である。官は勘定奉行に至り、幕末の対外交渉、例えばロシアとの和親条約締結交渉やアメリカとの通商条約締結の交渉にも重要な役割を果たした。井伊直弼が大老に就任すると、慶喜擁立の一橋派として、幕政の中心から逐われるまで、傾きかけた幕府の屋台骨を支えた重臣の一人である。彼が海防、外交に関わっていたので、職務柄、『海国図志』に興味を持つのは当然であり、その出版を企て、実行した動機は彼の使命感でもあろう。彼は千代田城引き渡しの日、ピストル自殺をし、徳川幕府に殉じている⁽⁷⁾。

次にこの訓点本の校訂作業を担った、塩谷世弘(宕陰)(1809～1867)は幕末の碩儒であり、浜松藩藩儒として水野忠邦に仕え、天保の改革の時は忠邦のブレーンの一人として活躍した。西洋列強(夷狄)の日本侵略を防がんとし、海防研究をも行った。アヘン戦争に関する文献を集めた『阿芙蓉彙聞』も著しており、経世意識の強い儒学者である。

最後に箕作阮甫(1799～1863)は幕末を代表する、医者であり蘭学者である。津山藩の藩医であり、川路聖謨の信任が篤く、長崎での、ロシア使節プチャーチンとの外交交渉の時、川路は津山藩藩医である彼をわざわざ随行させ、箕作は外交交渉の時通訳をも行っている⁽⁸⁾。川路

企画、出版の『海国図志』訓点本の校注者に箕作がなるのは当然の成り行きであった。晩年は創設された、蕃書調所の初代教授ともなっている。

この訓点本はこの三人の幕末において、ありうる最高のコンビによって誕生したと言えよう。佐久間象山ら幕末を代表する知識人に読まれた⁽⁹⁾のも当然と言える。

川路のみならず塩谷も、『海国図志』の訓点抄本に熱意を注いだ理由は塩谷の次の言葉から十分に理解できる。

従前、漢人、華を以て自居し、外蕃を視て、畜だ犬豕のみならず。其の地理政治に嘗としてこ瞽矐の器を摸るが如し。間に異国図志、西域聞見録、八紘訳史、荒史の類あるも、大率荒唐無稽の談にして、徴とするに足る者鮮し。此の編は則ち欧人の撰に原づく。実を取りて信を伝ふ。而して精華の萃むる所は乃ち籌海、籌夷、戦艦、火攻の諸篇に在り。夫れ地理既に詳しく、夷情既に悉し、器備既に足り（下線は筆者による）、以て守るべくは、則ち守り、以て戦ふべくは、則ち戦ひ、款すべきは則ち款す。之を左にし、之を右にす。惟だ其の資する所は、名は地志と為すも、其の実、武経大典なり。塩谷世弘「『海国図志』を翻栞するの序」（嘉永七年六月）

iii 訓点本の構成とその特徴

この訓点本は、『海国図志』の内、『籌海篇』、『普魯社国（プロシア〔スウェーデン、デンマークを含む〕部）、『俄羅斯国（ロシア）』、『英吉利国部』からなる。まず、『籌海篇』は海防を扱う篇であり、川路聖謨、塩谷世弘のみならず、当時の日本の知識人なら尤も関心のあるところであり、ロシアは日本北方の当面の脅威であり、イギリスは現実に中国をその支配下に置かんとする、東アジアにおける最大の脅威であり、ロシア、イギリスを選んだ

のは当然であろうが、プロシアを選び、アメリカを選ばなかった理由は不明である。

最後にこの訓点本の特徴を二つ挙げておきたい。一つは校訂の厳格さであり、一つは西洋の地名への片仮名よるルビである。前者は塩谷世弘が行い、後者は箕作阮甫が担当している。前者においては、塩谷世弘は「原刻（『海国図志』）甚だしくは精ならず、頗る訛字多し」（『海国図志』を翻案するの序）と言い、本文に「軀逐之」と「軀」が訛字がある場合は、本文はいじらず、該当の行の上の欄外に「軀恐当作軀（軀は恐らく当に軀と作すべし）」と書き、□で囲んでいる。

後者においては、本文中の漢字表記の西洋の地名などに、「佛蘭西」に「佛蘭西^{フランス}」という風に片仮名のルビを付け、読者の便を図っている。今日から見れば、さほどのことでもないが、当時の読者は西洋の地名の漢字表記には素養がなく、本文と地名との区別がつけがたく、ルビをつけることにより大いに読者の便に供したはずである。

4 小結

以上のように、『海国図志』の訓点本、和解本のこと、特に塩谷世弘、箕作阮甫の訓点本について論じてきた。この論点は本の由来、内容が主である。今後は読者の側から『海国図志』の受容について一考してみたい。それが日本における『海国図志』の受容を考える上でより重要に思われる。

注

- (1) 前田勉『江戸後期の思想空間』（ペリかん社、2009年）第三章「蘭学者の国際イメージ—世界地理書を中心に—」
- (2) 陳其泰、劉蘭肖『魏源評伝』（『中国思想家評伝叢書』、南京大学出

版社、2005年）第一章「家世及人生歷程」

- (3) 熊月之『西学東漸与晚清社会』（上海人民出版社、1994年）第四章「面对陌生」258～263頁
- (4) 陳其泰、劉蘭肖『魏源評伝』第八章第四節「延誤的回響：『海国図志』在近代中国的影響」
- (5) 茂木敏夫『変容する近代東アジアの国際秩序』（『世界史リブレット』41 山川出版社、1997年）「③中華世界による近代世界の包摂」
- (6) 江戸幕府の漢籍を継承した内閣文庫をはじめ、日本の主な漢籍所蔵図書館（藩校の蔵書を継承した図書館も多く含む）を網羅する全国漢籍データベース<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki?detail&or=FA019705>で、『海国図志』を検索すると、全部で114件あるが、そのうち唐本38件と活字本3件を除く73件が和刻本である。その和刻本のうち、塩谷、箕作校注・訓点本は36件で和刻本のほぼ半数を占める。
- (7) 川田貞夫『川路聖謨』（『人物叢書』吉川弘文館、1997年）
- (8) 川田貞夫『川路聖謨』198頁
- (9) 鮎沢信太郎『鎖国時代日本人の海外知識』（原書房、復刻版1978年）138～139頁、源了圓「幕末・明治維新时期における『海国図志』の受容」〔『日本研究』9 1993年〕